諏訪湾に注ぎ込む諏訪川は、海士町で唯一の河川ともいえます。2級河川として3面張り工法で改修されていることから、本来の自然のままの姿ではありません。しかし、改修後の歳月の経過により土砂等が河床に堆積してきたことから、そこにはガマの仲間、ミゾソバ、ヨシ、ジュズダマなど湿地帯植物が繁茂してきています。そして、植物の発生に伴い様々な淡水性の生物も増えてきています。ただ、生物が増えてきたからといって自然が豊かになったといえるわけではありません。確かに、多種多様な生物が生息していることが豊かな自然の条件ではありますが、それが在来の生物（過去からそこに住んでいた生物）で構成されていることが大切です。ところがこの川では、外国から移入された生物が多く見られるのです。その代表が「ウシガエル」（rana catesbeiana）です。おそらく住民のみなさんも一度は目にした事があるでしょう。巨大なカエルで、その名のとおり牛のように「ウー、ウー」と低い声で鳴きます。別名「食用ガエル」とも呼ばれます。大正7年ころ食用を目的に輸入されたことから付いた名称です。本来はアメリカ合衆国などに野生分布するカエルですが、戦後、国の指導により各地で養殖されるようになりました。しかし時代の変遷とともに、食料としてはなじまずどんどん野外に放され、結果として日本全国で相当数が野生化してしまったのです。貪欲な肉食で、口に入る生き物は昆虫、魚類、エビ、カニ、他のカエルなど何でも食べてしまいます。小亀、小鳥、ネズミまでも食べた例があるようです。かつては海士町には生息しなかった生物ですから、それが増えるということは、生態系に及ぼす影響は多大なものとなります。環境省では、このような外国からの移入種（帰化生物）の中で特に甚大に生態系を脅かす生物を「特定外来生物」として指定し、飼養、栽培、保管、運搬、輸入などの行為を規制し、駆除の対象としています。

諏訪川には、「ミナミテナガエビ」（Macrobrachium formosense Bate,1868）という海士町には分布記録のない絶滅危惧種のエビ（右写真）が生息していることが今年8月の調査でわかりました。島根県内でその数がどんどん減っている種です。また、東地区のため池では、島根県内でほぼ絶滅したといわれ国内においても絶滅が近いとされる「コガタノゲンゴロウ」（Cybister tripunctatus orientalis）という水生昆虫を今年10月の調査で発見しました。ところが、この場所にもウシガエルが相当数生息しています。これら希少種を保全するためには、生息環境を守るとともに、脅威の存在であるウシガエルを駆除する必要もあります。NPO法人隠岐しぜんむらでは、隠岐島前高校の生徒と一緒にウシガエルを捕獲して食べる活動を開始しました。**（海士町文化財保護審議委員　深谷　治）**